

# 緑の風

京都教育大学 環境教育実践センター 発行

第7号 2012年 2月2日

センターの1年 講座から学んで 懐かしの木々 ふたつの大きな石 太陽光発電と私 農業実習を受けて センターの花花



冬の農場風景

## 環境教育センターの1年

環境教育実践センターは、一年間を通じてたくさんの活動をしています。農場を使って行う「農業実習I, II」はその代表的なものです。それ以外に地域の学校や市民の方々との連携活動、栽培支援活動、かなりの回数の公開講座や体験教室、京都市教育委員会との連携事業（中学生「生き方探求・チャレンジ体験」）、地域ボランティア受け入れ事業など様々な活動を行っています。参加者は、おおよその延べ数で、学生1000人、京カレッジ受講生600人、公開講座600人、体験教室800人、学内・附属学校園の利用者800人、学外者の利用1300人など、年間5千人を超える児童・生徒、学生、市民の方々がセンターを訪れ利用されています。そうした様子の一部を、写真を交えて振り返ってみたいと思います。

### 「農業実習I, II」

#### 前期

ジャガイモ、コーン、茄子、ピーマン等の植え付けや、トマトの接ぎ木、菊の挿し木、タマネギの収穫、田植え、サツマイモの植え付け、落花生定植、緑のカーテン設置など



サツマイモ苗の植え付け

#### 後期

稲刈り、柿の渋抜き、サツマイモ、ピーナツの収穫、イチゴ、タマネギ、スイセンなどの植え付け、花壇づくり、餅つき、正月飾りの製作、ヒアシンスなどの水栽培など



もちつきに挑戦

### 地域の学校の受け入れ

イチゴやジャガイモ、サツマイモなどの収穫時期には、地域の幼稚園や小学校からたくさんの児童や生徒がやってきます。



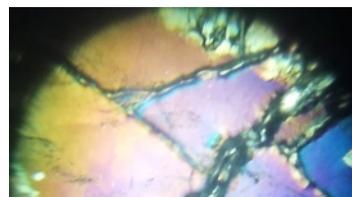
地域の幼稚園児のジャガイモ掘り

### 丹後での教員研修（8月）

環境教育に関する教員研修を宮津市で行いました。



田中里志先生による岩石講座



作成した岩石標本の顕微鏡写真

公開講座や講演会



里山講演会（12月）

体験教室



栽培体験教室（5月）

こうした多様な活動について、センターのHPに詳しく掲載していません。どうぞご覧下さい。

センターの講座から学び  
ボランティア実践活動へ  
大西千代恵

（花木を育てる会・代表）

私たちはボランティア活動として、山城運動公園（宇治市太陽が丘）を維持管理して子や孫たちに伝えたいと思い、紅しだれ桜（68本）、椿、桜、ハナミズキなど（現在まで58本）の植栽を続けています。これは、田淵先生、梁川先生の指導により取り組み始めてから10年の成果です。植栽よりも後の維持管理が大事であると先生方に言われ、ボランティアで維持管理をしています。平均年齢は高々齢となりましたが、健康に過ごして社会参加ができ、それが環境保護と情操教育になっているのも、講座で学んだ賜物だと思います。植栽した紅しだれ桜への添え木は、中学生がボランティア実習で手伝ってくれています。

（新聞記事と写真を4頁に掲載）

懐かしの木々（5）

学校に是非欲しいセンダン

田淵春三（本学名誉教授）

1952年、当時丹波町にあった高原農場への道すがら須知高校の玄関先にある堂々たる風格のセンダン（センダン科）の大樹に釘づけになった。ちなみに高校の前身は1876年京都府農牧学校として創建され、後に北大となる札幌農学校と比肩すべき名門校で、その伝統を示して余りあるものであった。傘型に大きく枝を拡げたその豊かな緑陰は涼味満点、農場にも是非植えたいと思わずにおれなかった。

それから20有余年を経た1975年、右京の蜂ヶ丘中学で講演の機会を与えられた際に運動場の北の法面のセンダンの果実を拾って帰り、果肉を洗い流して中の核を播いた。よく発芽し2mにもなった苗木を樹木園の西南の隅に定植した。生育は至って早く、10年もすると墨染通りから入ったゲートからも際立った存在となった。

5月になると優美な浅緑の葉の間に薄紫の芳香のある小花が円錐花序となって初夏らしい明るい雰囲気を出してくれる。落ちた一つひとつの小花が如何にも可愛い。1cm程の細長い5枚の花弁が反り返り気味に開き、中心に10本の雄しべが結合して紫色の筒となりその口に葯が、そして中に雌しべがある。夏、水平に拡がる枝に2~3回羽状複葉の大型の葉が軽やかな緑陰を落とす。

初冬、すっかり葉を落とした裸の枝にクリーム色をした長径1.5cm前後の楕円形の果実が程よい密度で残って、抜けるような青空を背にした風情も捨てがたい。冬、ムクドリの大群が果実に集まる。鳥たちが休んだ木の下には美しく漂白された核が無数に見られることがある。木質化した堅い核は1.5cm前後の楕円形で縦に深い5条の溝が刻まれ、丁度プラスのドライバーの先のように5室に分かれ中にはそれぞれ種子がある。



センダンは今、胸高幹周1.9m、2.5mの高さで二つに大きく分岐して枝を張り、高さ共に10数mに及ぶが残念ながら周囲の木々に邪魔されてやや影が薄い。その代わりと言うべきか、女子寮の塀沿いには通路に枝を張ることのできる立地条件に恵まれて本来の樹相を示す一樹があり、さらにその南には立派な子孫が林立している。



いずれにせよ四季折々を見事に粧うセンダンは学校にこそ相応しい。繁殖も容易だからどの学校でも子供たちの手で植栽されることを願っている。

## ふたつの大きな石

岩村伸一（美術科教授）

環境共生園の作庭に関わるようになっていつの間にか10数年がたっています。この環境共生園というのは環境教育実践センターの南に接している「空き地」のことです。なんでこんなところにこんな場所が、といった感じで、夏場は草が茂り放題ですが、秋から冬にかけては、草を刈って、そこでの造園を『作庭実習』という授業を通じて、毎年少しずつ進めてきました。街中では見られなくなった里山の懐かしい情景が目標です。この場所に導入した樹木も年ごとに大きくなって、ここ数年は、春先にそこに立つと樹木の芽吹きや萌えたち始める草の新緑が本当に素晴らしい。ささやかではありますが、なんとか森になりつつあると思っています。

今年度は、計画当初からの念願だった大きな石をふたつ手に入れ、据えました。わたくしの子どもの頃の記憶にある、棚田の片隅にあった丸い岩と、森の中の四角い岩。実物と比べるとずいぶん小さい印象ですが、受講生と一緒にあって、人力で動かすにはこれ以上は無理だと思われる大きさです。春が来たら、この場所を訪れて、探していただけたらと思います。



この環境共生園に関する様々な事柄については、京都教育大学環境教育研究年報（第15号～第20号）に掲載の『作庭実習「森をつくる」5～12』に詳しく報告してあります。参照願います



## 太陽光発電と私

浜田麻里（国文学科准教授）

何を隠そう、私はエコおたくである。きっかけはたぶん、大阪空港騒音訴訟のお膝元で幼少期を送り、灰色の工場排水が流れる神崎川を渡るとき異臭を防ぐために電車の窓を閉めるのがあたりまえという時代に育っていたことだろう。

また、中学時代の社会の教師が毎時間のように語る「公共の福祉と基本的人権の対立」の話の影響もあると思う。

70～80年代には都会の女性と農村の男性の集団見合いというのが流行していたが、私もいつかはあれに参加し、田舎暮らしをしようと夢見ていた。結果的に、いまはめでたく農家の「嫁」になった。

とはいえ、私のエコ実績といえば、ボカシを作ろうとして発酵と腐敗の境目を越えてしまったり、せっかく燃費のよさでミッション車に乗っているのに、名神を時速〇〇キロ（あえて秘す）で飛ばしていたりと、たかの知れたものである。

そんな私がただ一つ人に自慢できるエコは、自宅の屋根で太陽光発電をしていることだ。



2004年、築130年の自宅を改装するのを機に、太陽電池を設置した。再生可能エネルギーを自宅に採用することはずっと夢だったのだが、池内了著『わが家の新築奮闘記』（晶文社）で、それがセンチメンタリズムでなく合理的な選択であることがわかった。何より、地球環境を論じるなら自らの生き方から考えるべきという主張に大いに共鳴するところがあった。

実はお日様の出ている時間に私が家にいることはめったにないので、太陽光が作ってくれた電気のお世話になることは

ほとんどない。むしろ作った電気を関電に売電した利益の方が家計には大きい。

しかし、日が昇ってしばらくして発電が始まり、家族がまだ寝静まっている家の中に「カッ」とモニターのスイッチが入る音が響く瞬間は、なんともいえず心地よい。その音は「ほら、自然の恵みを受け取りなさい」と、太陽から発せられたOKサインであるかのような気になる。

エコおたくの次のターゲットは電気自動車である。またいつかこの欄に投稿させてもらえることを密かに期している。

## 「農業実習」を体験してみませんか

梁川 正（センター長）

環境教育実践センターでは、食用作物や野菜、草花などを実際に育てる体験と学習ができる「農業実習Ⅰ」（前期）と「農業実習Ⅱ」（後期）という授業科目を、センター内の圃場、水田、温室、ビニールハウス等で行っています。学生のみなさんは、卒業と免許取得のために多くの授業科目を修得しなければならないので、忙しいとは思いますが、上記の授業にはそれぞれ「学校園で役立つ農園芸実習Ⅰ、Ⅱ」という副題をつけており、卒業後に、学校現場等で必ず役立つ実的な授業科目で、広く全学のみなさんに受講をすすめています。

毎週、第2学舎に位置する環境教育実践センターに来てみますと、季節の変化を体感することができます。その中で、様々な植物を育て、継続して観察してみますと、植物の生長の不思議さ、生命力の力強さを感じられます。そして、美しい花や収穫物を楽しみ、植物を栽培する活動の大切さがわかります。

学校や幼稚園、保育園では、多くの植物を育てていますが、それらの中で、教員自身が植物を心から愛し大切にすることが、自然に心を寄せ、人を大切に、いのちを大切に、子どもたちに、育てることにつながるのではないのでしょうか。「農業実習Ⅰ、Ⅱ」の授業の中で行う、植物を育てる体験は教員となったときに、ほんとうに役立つ真の力になるものと思います。

さらに、植物を育てて収穫して、食用や観賞用に利用し、残りの植物残渣は本センターに設置されている有機物リサイクルシステムを利用してリサイクル堆肥を作成し、それを圃場や水田に施用して植物を栽培するという「食の循環」についてもあわせて体験、学習できます。

受講は「農業実習Ⅱ」からでも「農業実習Ⅰ」からでもどちらからでもかまいません。可能でしたら、「農業実習Ⅰ」と「農業実習Ⅱ」の両方を受講されると、1年を通した植物栽培を体験することができます。時間的余裕のある回生、時期での受講を期待しています。

## 農業実習Ⅱを受講して 網 達也(数学4回生)

選択必修の中で予定が合うものがこれしかなかったので選んだにすぎなかった。ところが、実際に授業が始まると、どんどん楽しみになっている自分がいた。

今までは、10数年前に家の花の世話にスコップを使った程度であったが、くわや鎌などからトラクター、杵と臼などを使う機会があり、こうした体験が授業に対する興味をどんどん高めてくれた。またこうした道具を使って作物や花を栽培・収穫する喜びや自然の恵みを感じさせてくれた。普段、何も思わず接している食物や花々に必要な手間の一部でも、この授業を通して知ることができたように思う。

## 岩崎みのり(家庭4回生)

この授業は1回生のときに「Ⅰ」を取ったのですが、今の学生にはぜひ受けてほしい授業です。農業を通して、作物が作ら

れ、収穫、食卓にあがるまでを体験できる貴重な時間でした。

来年から私は、赴任先の授業で農業体験をさせることになるかもしれない、と配属予定の学校からうかがいました。教員になると、家庭科以外の分野でも菜園をしなければならない時もあります。そのような場合のためにも大切な授業だと思います。

## 田中時夫(特別聴講生)

今年も1年間有り難うございました。学生との授業は、退職後の私にとってとても楽しく、1週間の大切な節目となっています。ここで体験したことを自分の小さな菜園で自分なりに実験的に試みることも楽しく、ジャガイモ、タマネギ、落花生など、とても立派なものができて驚いています。

## 中原節子(特別聴講生)

丸2年お世話になっています。毎回の講義ごとに、得ることが一杯でした。農作業というのは、年ごとの気候によって対応が異なり、「一生の仕事だなー」と思いました。

自分たちの植えたものが実を作って、それを食べる喜びはまた格別です。教育大の学生さんなど、若い方達はみんなまじめで感心しています。

残念なことは、これから農業の大切さが増してくるでしょうに、教育大で農業実習が選択制だということです。教育に農業の意識や知識を取り入れることが増々重要なのに、土をさわったことのない先生ができるなんてとても悲しいことです。絶対必修に入れてほしいと思います。

そして現場で子ども達と花や野菜を作ったり食べたりして、作る喜びや楽しさを味わってあげてほしいと思います。

## センターの花々

### ロウバイ(蠟梅 *Chimonanthus praecox*)



センター入り口からすぐの右側(高校駐車場南側)に美しく咲いている。樹木園と作業上との間にも大きく育った樹があるが、入り口のものの方が美しく見える。文字通り蠟細工の花のようで、派手さはないが、花の少ない冬に落ち着いた彩りを添えてくれるので、編集子の好きな花の一つである。甲賀の庭にも植栽している。Wikipediaによると、「唐の国から来たこともあり唐梅とも呼ばれ、中国名も蠟梅であったことにちなむ。本草綱目によれば、花卉が蠟のような色であり、且つ臘月(ろうげつ、旧暦12月)に咲くからこの名がついた」とされている。「花やつぼみから抽出した蠟梅油(ろうばいゆ)を薬として使用する」とのことである。

実生で簡単に育てられるそうなので、庭のある方はセンターのロウバイから採種して植えてみてはいかがでしょうか。

## スタッフから

### 辻 俊夫

1週間ほど前、この厳しい寒波のせいか爪先がしもやけになってしまいました。家で痒いだけの痛いだけの騒いでいると、先日防寒靴と厚手の靴下がおいてありました。「これで大丈夫やろ」あまりに煩かったのか嫁が用意してくれたようです。まだまだ寒さは続きますが防寒対策を万全にしてこの冬を乗り切りたいと思います。

### 志賀真人

センターの樹々もすっかり葉を落とし冬は剪定の季節。西側の柿、水田の周りにはほぼ終了し、2月には、春から日射しをたっぷり浴びたおいしい農産物が収穫できるよう、残る南側の剪定作業にも励みたいと考えています。

## 編集後記

今年度の最終号をお届けします。色々な方から「楽しく読んでいるよ」と声をかけていただき、随分はげみになりました。今後ともよろしく願います。もっとも、予算を使い過ぎてしまいましたので、次年度からは発行回数を減らすことになりました。ご了解ください。(O)



左下:山城運動公園での植樹を報道する新聞記事  
下: 紅しだれ桜に添え木する中学生

